

2017～2018 年度 国際ロータリーテーマ「ロータリー：変化をもたらす」

第2580地区

東京セントラルパークロータリークラブ

The Rotary Club of Tokyo Central Park

Weekly Report

2017～2018年度 スローガン

「温故知新 - 先人に学びロータリーを楽しもう」

第32回（通算1668回）2018年5月8日



本日の例会



- | | |
|---------------------|-------------------|
| 〈1〉 開会点鐘・会長挨拶 | 5月の結婚記念日「結婚記念日の歌」 |
| 〈2〉 国家斉唱「君が代」 | 安田会員 12日 花形会員 20日 |
| 〈3〉 ロータリーソング「奉仕の理想」 | 鈴木会員 27日 |
| 〈4〉 ビジター紹介 | 〈7〉 出席状況報告 |
| 〈5〉 幹事報告 | 〈8〉 メークアップ報告 |
| 〈6〉 5月誕生日祝い「誕生日の歌」 | 〈9〉 委員会報告 |
| 鈴木会員 4日 中山会員 17日 | 〈10〉 ニコニコBOX 報告 |
| 勝俣夫人 2日 塚本夫人 14日 | 〈11〉 閉会点鐘 |
| 橋本夫人 20日 | |



本日の卓話



本日の卓話 〈5/8〉「野球一筋の人生」

野球指導者 いけだ しげき 池田 重喜 氏

次回の卓話 〈5/15〉「クラブ研修会(仮)」

研修委員長 渡辺功一 会員

◆◆◆ 先週の例会記録 ◆◆◆

2018年4月24日 第31回(通算1667回)
 開会点鐘 白石会長 27階「エクセレンス」
 ＊ゲスト紹介 1名 三森隆文氏(卓話講師)
 ＊ビジター紹介 名
 出席 25名 欠席 10名 (免除者 2名)
 出席率 75.75% 補正出席率(4/3) 75.75%

◆◆◆ 幹事報告 ◆◆◆

- ① ガバナー事務所より6/2に開催されますローターアクト年次大会のご案内が届いております。

◆◆◆ ニコニコBOX報告 ◆◆◆

白石会員:三森先生、卓話楽しみにしております。
 ニコニコと。
 塚本会員:お誕生日の花、ありがとうございます。
 小野会員:ニコニコと。

今週の合計 3 件 6,000 円
 今期の累計 973,682 円

◆◆◆ 先週の例会から ◆◆◆



古内会員の仙台青葉 RC へのメイクアップ報告



「第38回フレンドリー・グリーンクラブゴルフコンペ」
 阿部ゴルフ同好会幹事より案内がありました

2018 学年度 米山奨学生の紹介

氏 名	ブルカエワ, マルジャン BULKAEVA, MARZHAN
国 籍	カザフスタン
奨学期間	2018/04/01-2019/03/31 一年間
カウンセラー	阿部亮介会員
所属先	東京理科大学 学部課程 電子応用工専攻
使用言語	ロシア語・日本語・英語
特 技	油絵・ギター・ドムビラ(楽器)
ニックネーム	マル

食物アレルギーで乳製品・卵が駄目です。
 また 宗教上の理由で、肉・魚が食べられません。ニックネール(マル)でよんで下さい。
 ※ 毎月、例会に参加してもらいますので
 皆さん、一年間よろしくお願いいたします。

第38回 フレンドリー・グリーンクラブ ゴルフコンペのご案内

下記の通り、第38回目のクラブゴルフコンペを開催いたしますので 皆様、奮ってのご参加
 よろしくお願い致します。

開催日	6月6日(水)
場 所	久邇カントリークラブ 埼玉県飯能市平松 470 ☎042-973-1192
集合時間	午前7時30分
開始時間	午前8時14分(東コース)
会 費	お一人 10,000 円
競技方法	18ホールズ 新ペリア方式 オール6インチ

※ コンペ出欠は 5月28日(月)までに
 Fax:03-3312-4958 にて事務局まで
 お願いいたします。



春 キャベツの花です

◆◇◆ 先週の卓話 ◇◇◆



「戦後ジャズ・ヴォーカル風雲録
～終戦からロカビリー登場前夜まで」
「Jazz Japan」編集長 三森隆文氏



大橋会員より三森氏の御紹介がありました

これからお話しするのは終戦後に訪れたジャズ・ブームとその中で発展していったジャズ・ヴォーカルの歴史の一コマです。

わたしは 1959 年生まれですので、リアルタイムでは当時の事情を知りません。が、父がスイング・ジャズが好きだったこともあり、戦前・戦中・戦後のジャズの置かれた状況については話をよく聞かされておりました。太平洋戦争開戦の年に工業専門学校に入り、そこでスイング・ジャズに憧れ、戦時下では隠れて聞かざるおえない状況の中、集めたレコードや趣味で吹いていたクラリネットは空襲で燃えてしまいました。戦後に自由にジャズが聴けるとなるとラジオにかじりついていました。終戦の焼け野原で就職もままならない時代でしたから警察官になり、ジャズ好きだったことからラジオの英語講座で英語を学び、MP についてまわる担当になり、グレン・ミラー、ベニー・グッドマンの活躍ぶりを聞いて興奮していたそうです。1983 年にはスイングジャーナル社に入社。当時の社長で 1947 年の創刊より関わっていた加藤幸三さんや、会社を訪れるジャズ・ブーム時代のミュージシャンの方々のから当時の話を聞いてお

りましたのでいつのまにかこの時代に惹かれていきました。伝聞という形でまことに恐縮ではございますが、そうしたお話も盛り込みながら、皆さんにお伝えしていきたいと存じます。

8 月 15 日に終戦を迎えると、戦時下には敵性音楽だったジャズは、音楽……特に軽音楽の分野において表舞台に一気に返り咲きます。このときの模様を、数々の映画やテレビの音楽を手がけ、日本の電子音楽のパイオニアとしても活躍した富田勲さんは「戦時下では聞くに聞けなかったジャズをはじめとする洋楽が日本に入ってきて、わたしはそれらの音楽を次から次へと聴き漁った」と語っています。

45 年 9 月には NHK が洋楽系のプログラムを放送開始。日本人ジャズ・アーティストが続々と生演奏を聞かせます。進駐軍クラブ向けのミュージシャンの需要も多く、戦前、戦中、戦後世代、中でも戦後世代が大きくはばたくきっかけを作りました。

そうした成果は、日本人がジャズを聞けるようになると日本のポップス界（＝軽音楽）でジャズが第一線に立ち、50 年台に入るとジャズ・ブームが到来します。

そんな最中の 1950 年末にはスイングジャーナル誌の読者人気投票が始まり 51 年に第一回の結果発表が掲載されています。では今回のテーマであるヴォーカル部門をご紹介します。

1951 年

女性：①ナンシー梅木(1929～)、②加藤礼子、③水島早苗(戦前)、④富樫貞子、⑤ベティ稲田(戦前)

男性：①笈田敏夫、②レイモンド・コンデ(戦前)、③仲間常次、④ティープ釜范(戦前)、⑤森山久(戦前)

ナンシー梅木と笈田敏夫は戦後のジャズ界が生んだヴォーカルの二大スター。加藤礼子は早稲田大学出身の美人シンガー、戦前派では、ベティ稲田は日系二世、水島早苗は戦前から活躍する日本ジャズ・ヴォーカルの草分け。ティープ釜范はかまやつひろしの父、森山久のは森山良子の父、森山直太郎にとっては祖父になります。クラリネット奏者でもあるレイモンド・コンデはコンデ三兄弟の末っ子。戦前にフィリピンでミュージシャンが日本にジャズをもたらしました。当時アメリカ

のジャズは直接入ってくるより、フィリピンに先に届き、そこを経由して日本にきたという説を唱える方もいます。富樫貞子はジャズ・ギタリストの沢田駿吾と結婚しました。仲間常次は不明。

この顔ぶれを見ているとスイング・スタイルが基本の方々です。この時期には米軍とともに入ってきた当時最先端のビバップに感化されたバンドが多かったのですが、まだビバップの消化には至らず、スイングとビバップの中庸をいくスタイルが主流でした。大橋美加さんのお父様で、ジャズ評論家をされていた大橋巨泉はそうしたスタイルを中間派と名付けました。

ナンシー梅木(梅木美代志)は 55 年にアメリカにわたり、56 年に全米を代表するオーディション番組「アーサー・ゴッドフリー・ショー」に出演したのをきっかけに注目を浴び、マーキュリーから 2 枚のアルバムをリリースします(56, 58 年)。57 年にはハリウッド映画「サヨナラ」に出演し、アジア系でははじめてアカデミー賞助演女優賞を獲得しました。その後もブロードウェイ・ミュージカル「フラワードラムソング」、映画、テレビ・ドラマに出演しました。

ナンシー梅木に関してはスイングジャーナル時代に記事を組むため、当時を知る方々に取材を行いました。笈田さんは、彼女は「恋多き女性」だったと語ってくれました。生地の小樽で歌うようになり、通訳だったお兄さんの影響で米軍将兵とも交流があったそうです。上京して活動を本格化させるなか、彼女は駐留軍の男性と付き合いながら英語力をみがき、ジャズを歌う上でのフィーリングを実践で学んでいたそうです。当時は二人で共演することも多く、とても勉強熱心な女性だったそうです。また渡米後もニューヨークからスイングジャーナルに寄稿をしています。この時代に写真付きでアメリカ音楽界の状況をアーティスト視点で綴っているのはとても貴重です。

アメリカで成功をおさめ、60 年代には帰国公演を行うのですが、ジャーナリストから「時代遅れ」という酷評を受けてしまいます。梅木は笈田に「もう二度と日本には帰らない」言い残してアメリカに戻っていきました。その落胆ぶりはかなりのものだったとそうです。

そういえば、アメリカにおいても 50 年代に登場した白人ジャズ・ヴォーカリストの多くが、60 年代ロックロール/ロックの台頭によって歌う場もレコード

を作る機会も奪われたとされています。ナンシー梅木が受けた評価にはそうした背景があったのかもしれませんが。話は少し遡りますが、ビッグフォーのメンバーだった方が、売れる前に住んでいた安アパート…ここにはミュージシャンが多かったようです。そこには梅木も住んでおり、「外人のボーイフレンドがひんぱんに訪れ、英語ばかりの賑やかな部屋だったなあ」と語ってくれました。さらに当時は入手の難しかったアメリカのレコードや楽譜を彼らからもらっていたのが記憶に残っているそうです。したたかな女性でもあったんですね。

レコードの入手がどれくらい難しかったと言いますと、かつて銀座セントメリー・ブザマの社長だった藤山峯生さんは、終戦直後はジャズのレコードが手に入らず、銀座の松屋や和光が接收され米兵向け売店である PX の前に待機して、話のしやすそうな米兵が来ると、「中でジャズ・レコードを買ってくれませんか」とお願いし、手数料も渡していたそうです。

52 年から 53 年にかけてジャズ・ブームは頂点に達し、JATP のようなジャム・セッション型のブロー・ジャズが音楽エンタテインメントとして一世を風靡します。

53 年の状況を反映した 54 年のスイングジャーナル誌の読者人気投票のヴォーカル部門をご紹介します。

女性 ①江利チエミ、②ナンシー梅木、③ペギー葉山、④雪村いづみ、⑤新倉美子

三人娘のうちのジャズをルーツとする江利チエミと雪村いづみが登場します。新倉美子は新国劇のスター、辰巳柳太郎の娘でその美貌からアイドル的存在でした。ペギー葉山ものちに歌謡界に転身して大成功をおさめます。こうしてみるとジャズ・シンガーがポップスのスターと重なっていたことがわかります。

男性 ①笈田敏夫、②柳沢真一、③黒田美治、④フランキー堺、⑤レイモンド・コンデ

男性ヴォーカルでも同じような傾向が見られます。柳沢真一、フランキー堺は俳優としても成功しました。黒田美治はカントリー & ウェスタンで成功。なかでもフランキー堺はドラマーでもあり、シティ・スリッカーズを率いてコミカルなジャズを演奏、スパイク・ジョーンズの冗談音楽を模範にしていると言われました。

参考までに当時の洋楽系ポップスを扱っていたミュージックライフ誌の翌 55 年の人気投票と比較しますと、女性は江利チエミ、ナンシー梅木、ペギー葉山、雪村いづみといった顔ぶれは同じでここにタンゴの藤沢嵐子が加わっています。SJ 誌ではナンシー梅木と藤沢嵐子の対談を掲載していましたから、ジャズとタンゴの距離は近かったのかもしれませんが。

男性は旗輝夫、笈田敏夫、柳沢真一、武井義昭、黒田美治、ティーブ釜萇といった顔ぶれは同じですが、元祖和製プレスリーと呼ばれた小坂一也が加わります。

スイングジャーナルの人気投票と顔ぶれが重複していることから、ジャズ・シンガーの人気度が伺えます。

こうしたジャズとポップスの蜜月時代は 50 年代後半から徐々に崩れていきます。日劇を飲み込んだジャズ・ブームも 58 年にはロカビリーにその座を明けわたします。しかし本国のアメリカではロックンロールとヒルビリーがミックスしたロカビリーはすでに下火になっていました。逆にロックンロールは 60 年代にロックへと進化し、ブリティッシュ・インベイジョンやニュー・ロックの台頭から、先ほども白人ヴォーカリストのことでお話ししたようにアメリカ本国でもジャズは徐々に打撃を受け、70 年台に向かうにつれ、メインストリーム・ジャズと呼ばれる音楽よりも、当時のポップスとクロスオーバーしたジャズが前面に出て行くようになります。

日本人のジャズがロカビリーに押されがちだった 50 年代末、ジャズはビバップから発展したハードバップやモード・ジャズ、ウエスト・コースト・ジャズの影響を受けた洗練されたモダン・ジャズへと向かいます。61 年 1 月にはアート・ブレイキーとジャズ・メッセンジャーズの来日をきっかけとするファンキー・ブームで爆発します。が、それはジャズに洋楽偏重主義ももたらしました。

では、58 年の状況を反映した 59 年のスイングジャーナル誌の読者人気投票をみてみましょう。

①マーサ三宅、②丸山清子、③北川寿美(すみ)、④江利チエミ、⑤小割(こわり)まさ江
ここで大橋美加さんのお母様であるマーサ三宅を筆頭に新世代が登場します。

丸山清子は秋葉原ラジオ会館にあった丸山無線のお嬢さん。北川寿美、小割まさ江はジャズ専門の若手シンガーでした。

①武井義昭、②笈田敏夫、③中島潤、④旗輝夫、⑤ジェームス繁田

武井義昭、中島潤、旗輝夫はジャズ・シンガー。ジェームス繁田は日系アメリカ人で日米での活躍や俳優としても大成しました。

ここまではおもに第一期ジャズ・ブームの最中にデビューをして育ってきた世代です。

先ほども申し上げたファンキー・ブームでビバップの洗礼を受けたアーティストが次々と来日するようになると、日本のジャズ界もポップス界の動きとは別にビバップ、俗にいうモダン・ジャズの流れがメインストリームとなって行きます。笈田敏夫、マーサ三宅はそうした変化の中でも自分のスタイルと変わりゆくジャズとの共存を果たして、ジャズ・ボーカルの第一線に立ち続けます。

ブームという言葉に比して、この時代のレコードはそれほど多くありません。私がスイングジャーナルに入った頃は、ジャズ・ファンはレコード派とライブ派に二分されており、その二つは相容れない、さらにレコード派はライブ・レコーディング作品を嫌がると教えられました。

しかし、ライブはリアルタイムの観客を熱狂させてくれるものの、歳月を重ねていくと忘れ去られて行きます。そのときのそのときの音を記録するのは重要なことであり、後世に語り継ぐ上でも大切です。

いま、パッケージメディア(フィジカル)自体が存亡の危機に立っていますが、こうした時代だからこそ、今までの偏見をリセットし、熱狂の渦の中で、ジャズを目指した才能あふれる若き音楽家と、そこに憧れたたくさんの若きファンのおもいを、この機会にお触れ戴きたいと思います。

—事務局からのお知らせとお願い—

＊ 例会欠席の場合は、前日までに事務局にご連絡下さい。

例会日 毎週火曜日 12:30～13:30

例会場 ハイアットリージェンシー東京

会 長 白石 正 副会長 松林 茂

幹 事 橋本 国彦 会報委員長 阿部 亮介

事務局 〒166-0004

東京都杉並区阿佐ヶ谷南 1-34-6 新東京会館

TEL(03)3312-4959 FAX(03)3312-4958

E-mail: info@tokyocentralpark-rc.com

<http://www.tokyocentralpark-rc.com/>